

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く ⑦③

別シリーズ
特

京極氏と浅井三姉妹物語 其の十一

その後の京極家

若狭一國を領した京極高次の系譜は、寛永十一年(一六三四)に高次の息子忠高が二六万四二〇〇石で出雲・隠岐二か国の大々名となり、松江城(島根県)に入ります。一三年には、石見銀山と二郡四万石が増増され、京極家は隆盛に向かいます。出雲国と隠岐国は、京極道誉が守護を務めて以来、中世京極氏の領国です。道誉は若狭国の守護にもなっていることから、江戸時代になって京極氏が配置された領国は、古くからゆかりのある場所であることがわかります。しかし、忠高は同一四年に江戸在勤中に急死します。子どもがなかった忠高は、世継ぎを定めて幕府へ届けられなかったためにお家断絶が宣告されました。老臣佐々九郎兵衛光長は、忠高の弟高政の長子高和を世継ぎにすべく、単身江戸に出向いて、

死を覚悟で幕府に直訴しました。

その口上にいわく「徳川家の今日の安泰があるのは、高和の祖父高次が、関ヶ原合戦の際、家康公の御為に大津の城を死守して、豊臣方四万の西軍を阻止したことが、東軍の勝因となったことは明白」だと訴えました。このころ、旧豊臣系大名を中心に大名廃絶政策が取られたため、家康・秀忠・家光三代の時代に外様大名八二家、親藩・譜代大名四九家が改易されています。外様大名である京極家も領地と城を没収されるどころでしたが、佐々の懇願の結果、出雲・隠岐二国を没収する代わりに、高次の大津籠城の恩顧をもって、大津六万石と同じだけの領地を播磨龍野(兵庫県)で与えられました。立花宗茂など九州・四国の猛将率いる四万の軍を相手に十日余りも戦いぬき、さらに、京上方にいる西軍の本隊を通過させなかった高次の戦功を、幕府がいかに高く評価してい

たかを、この復活劇にもみることでできます。しかし、残念ながら、以降は京極家とゆかりの地に配されることはなく、京極高和は、万治元年(二六五八)、讃岐丸亀藩六万石(香川県)に移り、明治維新まで七代二二二年間続きました。なお、丸亀藩は三代高或のときに多度津藩一万石を分藩しています。

関ヶ原で東軍の一翼を担った高次の弟高知は、丹後一國一二万三千石を領し宮津城に入ります。三人の息子が宮津・田辺(舞鶴)・峰山に分かれ、のちに宮津京極家は改易後、旗本に。田辺京極家は、但馬豊岡(兵庫県)に転封し、明治維新を迎えます。

歩みを振り返る

これまで一回にわたり、浅井三姉妹の動向を交えながら京極氏の歴史をたどってきました。京極氏は約六三〇年間大名家として続いた非常にまれな一族といえます。鎌倉時代から江戸時代まで存続した大名家には、辺境の地を拠点にした伊達や島津・相良などがあります。近江という、いつの時代も歴史の表舞台に登場する地域を拠点とした京極氏が、長く存続したのはなぜでしょう。か。鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて、激動する情勢を見すえて行動し、

京極氏の基礎を築いた高氏(道誉)。一族の内紛を納め、北近江に一時的とはいえ平和をもたらした上平寺城主高次。名門の家柄をかなぐり捨て、織田信長に臣従した高吉。そして、信長・秀吉・家康のもとで激闘し、京極家の中興した高次。ときに姉妹・妻女の力を得ながら、ときの権力者と個人的なつながりを持ち、柔軟に対応してきたことが大きな要因です。また、信長や秀吉にとつても、近江源氏佐々木氏一統が割拠する近江を支配するためには、その惣領家として京極氏を置く必要があります。高次はそれにみごとに応えました。

(歴史・文化財保護室)



▲ 丸亀城跡